

東京講演会を開催

平城遷都1300年を記念して、2010年から始めた東京講演会も今年で5回目となりました。奈良文化財研究所は、考古学や文献史学、建築史、造園学、年輪年代学、環境考古学、保存修復科学、文化的景観等、多彩な分野の研究者が文化財の宝庫である奈良の地で、実物に即した文化財の総合的・学際的研究に取り組んでいます。この東京講演会は、そうした奈文研の日頃の活動や調査・研究の成果を広く紹介するための企画で、毎回切り口を変えて、文化財研究の魅力や面白さ、課題等をお伝えしています。

今回の東京講演会は、9月22日、有楽町朝日ホールにおいて「〈歴史の証人〉木簡を究める」と題して開催しました。

1961年に平城宮跡で最初の本簡が発見されてから半世紀が経過し、現在、全国から出土した本簡の総数は38万点を越えるほどになり、特に資料の絶対数が少ない日本古代史の研究にとって、今や本簡はなくてはならないものとなっています。

そこで、歴史資料としての本簡そのものに焦点をあて、6人の奈文研の研究者が『本簡を掘る』、『本簡を探る』、『本簡を読む』、『本簡を広げる』、『本簡と文字』、『本簡を伝える』として、その発掘から整理・研究の実状、本簡の保存方法等、奈文研が半世紀にわたって培ってきた本簡研究のノウハウを多角的に紹介しました。その後、『本簡研究の過去・現在・未来』として、講演者に外部の2人の専門家を加え、パネルディスカッションをおこない、会場からも多くの質問があり、大変盛況のうちに終了しました。

当日は、400人を越える方が来場され、演者の話を時にメモを取りながら、熱心に聴き入っていました。

(研究支援推進部 田中 康成)



講演会風景(東京会場)

移転について(現庁舎から安全な仮設庁舎へ)

奈良文化財研究所は2012年に創立60年の還暦を迎え、同時に本庁舎建替事業をスタートさせました。

奈文研の庁舎の歴史としては、1953年に奈良市春日野町の旧奈良県商工館(現奈良国立博物館仏教美術資料研究センター)を最初の庁舎として開所し、その後、1980年に旧県立奈良病院を改修した現在の庁舎に移転してきました。

現在進めている本庁舎建替事業は、平城宮跡内の佐伯門東側に仮設庁舎を設置することから始まり、本年12月には本庁舎と研修棟の機能を移転させ、新庁舎が完成する2016年春までの約2年間は仮設庁舎での研究活動等の業務をおこなうこととなります。

仮設庁舎は現庁舎と比較すると面積が減少しますが、病院特有の広い共有スペースを減らすこと等により研究室は現在とほぼ同じ面積が確保されています。また、研究室はもともと病室であったため、電源等の面で機能不足が多数ありましたが、仮設庁舎では研究業務を考慮した設計になっています。更に、見かけはプレハブですが安全性(耐震機能)は現庁舎以上であり、仮設庁舎の方が安全な建物といえます。

なお、庁舎移転については、奈文研ホームページ(<http://www.nabunken.go.jp>)でもご案内しております。一般の方々には、図書資料の閲覧等についてしばらくの間ご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

(研究支援推進部 今西 康益)



建設中の仮設庁舎